

# 若年未就業者向けキャリア支援への 構成的グループ・エンカウターの試行的実践

小野 邦彦<sup>1</sup>

## 1. はじめに

文部科学省の調査によれば、近年の高等学校の生徒数の推移について、全日制・定時制課程の生徒数は全体として減少傾向にあるが、通信制課程の生徒数は全体として増加傾向にある。また、令和3年5月1日現在の高等学校の生徒数について、全日制・定時制課程では3,008,182人（全体の93.2%）、通信制課程では218,428人（全体の6.8%）となっている（図1）。つまり、高校生の内、約14人に1人は通信制に通っていることになる。

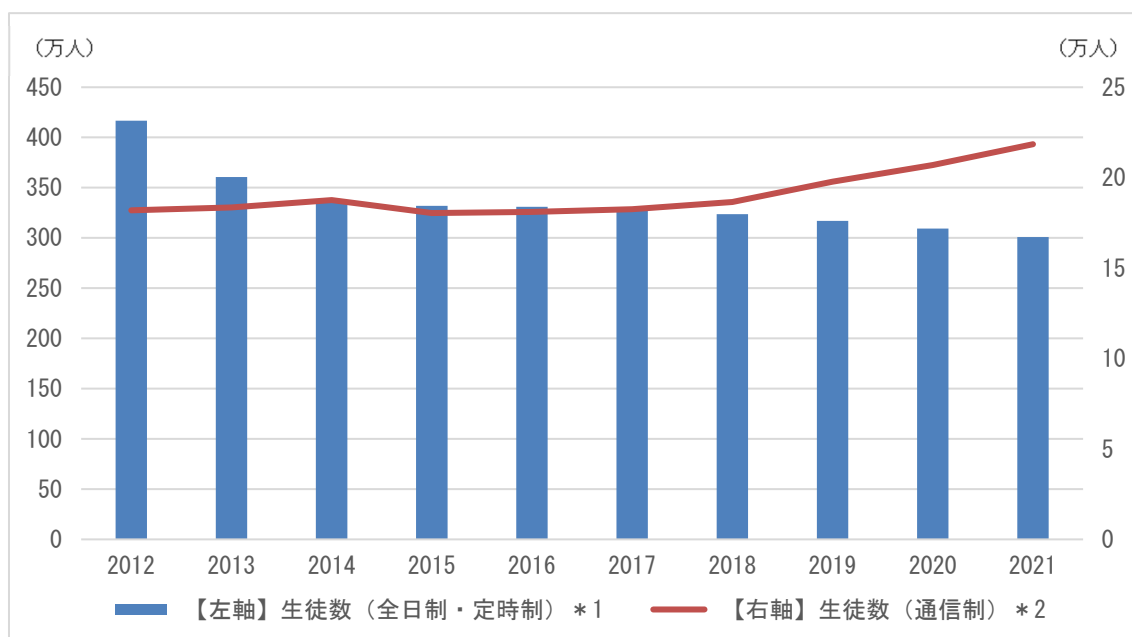


図1 高等学校の全日制・定時制と通信制の生徒数推移

出典 文部科学省「学校基本調査」「文部科学統計要覧」<sup>1) 2)</sup>

(\*1) 5月1日時点、全日制・定時制課程の生徒数には、専攻科、別科に属する生徒数を含む。

(\*2) 5月1日時点、通信制課程の生徒数には、他からの併修者の数は含まれていない。

<sup>1</sup> サイバー大学 IT 総合学部・教授

他方、直近5年間の経年変化を見ると、通信制のサイバー大学（以下、本学）における在学学生数は年々増加傾向にあり、全在学学生に占める10代・20代の若年学生も、2017年の810人（全体の42.1%）から2021年の2,095人（全体の56.5%）まで、その数も割合も大きく増加している（図2）。

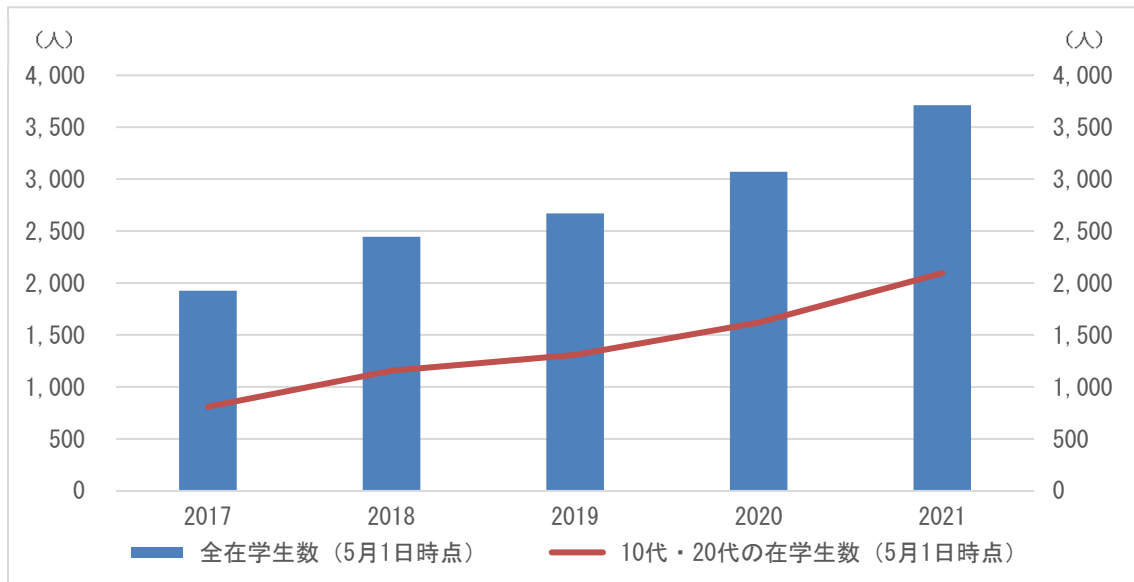


図2 サイバー大学の在学学生数（全体と10代・20代）の経年推移

近年、10代・20代の入学者が急増しており、その内の一定数は前述の通信制高校の卒業生が占めている。通信制課程の高等学校の生徒数と本学の若年学生はいずれも増加傾向にあり、一定の相関関係があると推察されるものの、本学の10代・20代の学生の属性は、通信制高校卒に限らず極めて多様である。この点の精査は本稿の扱う範囲を超えているため一旦措くことにするが、いずれにせよ、若者の価値観やライフスタイルが多様化し、通信制という進路選択が当たり前になる将来もそう遠くないのではないかとすら感じられる。多様な学生・生徒が在籍する通信制課程において、通信制ならではの長を活かした教育活動に工夫を凝らし、画一的な学びから多様な学びへ向けて、視点の転換を図っていく必要があるといえるだろう。

そして、若年層が著しく増加する傾向にある本学において、就業経験の無い学生や現在離職中の学生等に対するキャリア形成支援や就職支援の重要性が益々高まっていることを受けて、2021年4月、学生部傘下にキャリアサポートセンターが発足している。筆者も担当教員として職務に従事しているが、本稿では、キャリアサポートセンターの取組みとして、就職活動を控えた若年未就業者に対し、親密な人間関係づくりを援助するための手法である構成的グループ・エンカウンターを試行的に実践し、その検証を通じ、本学の今後のキャリア支援に本手法を導入する意義や課題を検討することを目的とする<sup>3)</sup>。

## 2. 構成的グループエンカウター（SGE）の試行

### 2.1. 事前の問題意識

本学はフルオンライン大学であり、授業は全て、いつでも、どこからでも、何度でも受講可能なオンデマンド型が基本であり、時間と場所の制約無く柔軟に学べるメリットがある一方、授業内の取組みとして、教員と学生間で、もしくは学生同士でリアルタイムに声を発してディスカッションを行う機会は限定される。

他方、就業経験の無い若年学生からは、協力して何かを成し遂げるような経験をもっと積みたいといった声を聞くこともしばしばであり、まずは授業外のキャリア支援の一環として、抵抗無く参加できる相互交流の「場」をオンライン上に用意し、自己肯定感や自己受容を育て、仲間同士の理解と承認の促進を行うことが出来ないだろうかと考えた。在住地もバラバラであり、クラスメイトの顔が見え難いフルオンライン大学であるからこそ、こうしたねらいを持った機会提供に意義があるのではないかと考えた次第である。

ただし、筆者は教育心理学等の専門性を有しておらず、今回の実践は既存の代表的な理論に準拠しながらの試行的かつ初歩的な取組みであることを予め断っておきたい。

### 2.2. SGE の概要

人間関係づくりと自己発見・他者理解を通じての人的成長を図る心理教育的な技法として、構成的グループ・エンカウター（Structured Group Encounter、以下 SGE と略記）と呼ばれるグループ・アプローチがある。全国の教育委員会の多くが SGE を教員研修プログラムに取り入れるほど、広く実践されている代表的な技法の 1 つであり、小・中・高、さらに大学でもさまざまな形の実践が報告されている<sup>4)</sup>。

「エンカウター」とは、國分によれば「自分のホンネに気づき」、「状況に応じてそれを他者にオープンにすること」を意味する。また、「エンカウターのキーコンセプトの 1 つは自己開示である。自己開示、つまり自分の内界を他者にオープンにすることがなぜ大切か。自己肯定感が高揚するからである」<sup>5)</sup>。

エンカウターの技法は、①インストラクション（指示・説明）、②デモンストレーション（自己開示による例示）、③エクササイズの展開、④インターベンション（介入）、⑤シェアリング（自己開示の相互交流）の五つである。また、メンバーが自己開示とシェアリングを安心して深化できるよう、①テーマの設定、②時間制限、③グループサイズの設定、④グルーピングの条件、⑤参加者の条件、⑥外界との交流の制限の六つのグループ活動の枠を設定する。このように意図的に枠組みされた集団を「構成的グループ」という<sup>6)</sup>。

### 2.3. グループおよびエクササイズの概要

今回、実践したエクササイズは、『構成的グループエンカウター事典』所収の 300 以上

のエクササイズの中の、ふれあいと自他発見を目標として、学習者の教育課題の達成を目的にする「スペシフィック SGE」を選択し、その内、「私が学校に行く理由」というテーマをアレンジし、「私がサイバー大学で学ぶ理由」としてテーマを設定した<sup>7)</sup>。今回は初回かつ試行的な取り組みであることを踏まえ、2名のみ学生のグループとした。また、本来のエクササイズの時間は60分とされるが、参加者の自己開示、シェアリング、その他意見交換を丁寧に実施し、一つひとつの手順を確認しながら進めるため、時間制限は緩く設定し、時間短縮のために発言を抑制するなどの誘導も行わなかった。以下、概要を記す(表1)。

表1 グループおよびエクササイズの概要

日時	2021年12月15日(水) 13:00~15:30	
形式	Zoomによるオンライン開催	
テーマ	私がサイバー大学で学ぶ理由	
参加者	リーダー(ファシリテーター)	筆者
	メンバー	2年次の学生(男)1名
		3年次の学生(男)1名
オブザーバー	キャリアサポートセンター職員2名	
ねらい	自分と仲間との価値観の違いを知る	
背景となる理論 ・技法	技法	自己開示 創造的思考法(ブレインストーミング、カード式グループ発想法)
	インストラクション ・介入	その場の流れで抵抗感を感じ、発言できないと思った場合は発言しなくても良い 出された考えを批判せず、すべて受け入れる たくさん考えが出た方が良いこととする

#### 2.4. エクササイズの内容

エクササイズの実施上、メンバーに心的外傷を与えないことに留意し、自己開示を強制しないことや、レディネスとモチベーションに即したプログラムになるよう配慮した。そして、導入のインストラクションで、エクササイズのねらい、方法、留意点を説明し、メンバーの納得を確認してから開始した。また、メンバーが意見を述べやすい環境を整えるため、まずはリーダーである筆者が、題材にまつわる所感や本学との個人的な関わり等を自己開示した。

さらに、個人情報に配慮しながら、本取り組みを本学の研究誌『eラーニング研究』に公表することに関わるインフォームド・コンセントを丁寧に行い、了承を得た。以下、エクササイズの内容を記す(表2)。

若年未就業者向けキャリア支援への構成的グループ・エンカウンターの試行的実践

表2 エクササイズの内容

No.	内容	備考
1	キャリアサポートセンターの紹介	
2	主旨説明	構成的グループ・エンカウンターの意義とねらい
3	リーダーの自己紹介	
4	キャリアサポートセンター長の自己紹介	
5	キャリアサポートセンター職員の自己紹介	
6	メンバー（学生2名）の自己紹介	
7	インストラクション	テーマ、ねらい、方法、留意点
8	「私がサイバー大学で学ぶ理由」を1つだけZoomのチャットで投稿	
9	メンバー2名で、上記「理由」を思いつく限り考えてもらう	
10	内容の似ているもの同士で「理由」をグルーピングし、まとまりごとにタイトルを付ける	Google スライドで共有
11	「理由」をメンバーで分担して発表	
12	まとめた「理由」について、自分が大切だと思う順に順位をつけ発表する	
13	シェアリング	このエクササイズを通して気づいたこと、感じたこと

### 3. SGE の実践結果

#### 3.1. 「サイバー大学で学ぶ理由」

参加学生は2年次の学生1名および3年次の学生1名であり、「サイバー大学で学ぶ理由」を思いつく限り考えてもらった後に、内容の似ているもの同士でグルーピングした結果、以下の4つが整理された。

- ① 卒業後の可能性を広げることができる
- ② 最新のテクノロジーを習得できる
- ③ フルオンラインによる柔軟な学び
- ④ 社会人からの刺激と学び

2年次の学生は、通信制高校卒業後、海外滞在経験を経て、テクノロジーを活用したニュースメディアやジャーナリズムの課題解決に関心を持つ。そして、「順位をつけるのは難しい」としながらも、①④②③の順で優先順位を付け、大卒であれば様々な可能性が広がり、社会で活躍できるスキルを身に付けられること、時間を選ばないオンデマンド授業はメリハリを付けて自分の学びに集中し易いこと等のメリットを述べていた。また、「ロジカルに物事を解決していく楽しさは、社会人学生や社会人の卒業生に育ててもらった一番の学び。授業で得たスキルや知識の使い方を社会人から学ぶことが出来ている」と、授業外で社会人と交わる機会の意義と有効性を語っていたことが印象的である。

3年次の学生は、高卒後、ワーキングホリデー制度を活用して海外で働いた際、小売店のセルフレジやマクドナルドの無人レジ、インターネットバンキング等、日本よりも進んでいる実態を目の当たりにし、帰国後、自分の武器になるITを学びたいと考えた。①②③④の順で優先順位を付け、卒業後の国内での就職を一番の理由として挙げ、フルオンラインで海外からでも受講できることのメリットを感じたとのことである。そして、学費を自分で工面するためアルバイトをしているが、通信制はアルバイトへの時間も割きやすいことや、さらに大学だからこそ、IT以外の分野も幅広く学べることのメリットを語っていた。

### 3.2. シェアリング

最後に、このエクササイズを通して気づいたことを各自発表し、以下の感想を得た。

- ・一般的な価値観ではなく、本学だからこそその多様性を活かして何かできないかと思った。
- ・通信制はまだ主流とはいえないが、多様なキャリアを歩む若年層が集まるからこそその結束力の強さを再認識し、その可能性も感じた。
- ・入学理由や本学で学ぶ理由を整理出来たので、就職活動の面接の準備として使える内容だった。
- ・自分1人ではこんなに考えを出せないところ、2人で考えを出し合ったので色々な観点で整理できた。
- ・こうしたグループワークの経験が無いと、アウトプット出来る知識の量が増えないと思った。
- ・授業以外の場で思いを共有できる場があると楽しいので、在学生や卒業生が集うコミュニティにも参加してみたい。
- ・学生が2人しかおらず、最初は緊張し、3人の教職員に監視されている感じもしたので、もう少し参加学生の数が多い方が良かったと思った。

### 3.3. 「多様な学生」から何を生み出せるか

既に述べた通り、全日制・定時制課程の高校生数は全体として減少傾向にある一方、通信制高校の生徒数は年々増加傾向にある。こうした時代背景と呼応するかのようにより、通信

## 若年未就業者向けキャリア支援への構成的グループ・エンカウンターの試行的実践

制の本学でも 10 代・20 代の入学者数が急増している。

今回の SGE の取組みを経て、通信制で学ぶことを選択する若者が歩むキャリアの多様性の一端をあらためて再認識するに至った。様々な学生が在籍していることを踏まえ、一人ひとりの特性やニーズに合ったキャリア支援が必要とされるが、課程外での「対面性」を補完するための方策として、SGE の意義を実感することが出来た。特に、就職活動を控えた学生向けのキャリアガイダンスに対し、短時間の集団学習体験を通して、自己理解・自他発見による行動の変容と自己成長を促進出来る可能性がある。

SGE という形態に限らず、Zoom を活用した双方向的な交流の機会が増えていくと思われるが、SGE では具体的なテーマを設定し、安心できる場で本音の発言を促すその意図性により、学生のレディネスとモチベーションに即した教育課題の達成により近づきやすいのではないかと思料している。

そして最後に、社会人と交わる機会の意義や有効性について、自らの経験談を語る学生がいたことに触れておきたい。近年、就業経験の無い若年学生が急増しているとはいえ、2021 年時点で 6 割弱を社会人学生が占め、働きながら学ぶ社会人が多数派であることに変わりは無い。発言のあった学生は、在学生や卒業生が集うコミュニティに積極的に参加し、そこで社会人学生や社会人の卒業生と直接接する機会を得ていたが、他の若年学生の多くが同じように社会人と活発に交流しているという実態があるとはいえない。

若年学生と社会人とが接する機会を通じ、両者の気づきや成長を促す循環を組織的に確保することが出来れば、社会人学生の多い本学らしい、多様な学生の相互交流による新たな価値創造に繋がるのではないだろうか。つまり、SGE 等の「ふれあい」を意図的に促進する取組みは、若年学生同士の接点を増やすだけでなく、若年学生と社会人との人間関係づくりの中にも可能性を秘めていると考えられる。

### 謝辞

本研究はサイバー大学課題研究助成金（2021 年度）の助成を受けたものである。本稿の趣旨を理解し、SGE に参加してくれた本学の学生 2 名およびキャリアサポートセンターの日高智運センター長、そして同職員の増田美里氏のご協力に心からの謝意を表す。

注および参考文献

- 1) 文部科学省学校基本調査「高等学校（全日制・定時制）の生徒数」「高等学校（通信制）の学校数・生徒数及び教職員数」e-Stat [政府統計の総合窓口] (参照 2020-12-25) .  
<https://www.e-stat.go.jp/stat-search/files?page=1&toukei=00400001&tstat=000001011528>
- 2) 文部科学統計要覧（令和3年版）「高等学校」（参照 2020-12-25） .  
[https://www.mext.go.jp/b\\_menu/toukei/002/002b/1417059\\_00006.htm](https://www.mext.go.jp/b_menu/toukei/002/002b/1417059_00006.htm)
- 3) キャリサポートセンターでは、2021年10月より、「学生生活」や「キャリア」について気軽に話せる双方向型イベント「キャリアサポ LIVE!」を月1回程度の頻度で開催している。本取組みは、「キャリアサポ LIVE! 特別編」として実施した。
- 4) 水野は、近年の大学におけるSGEの実践について整理している。（水野邦夫「大学の授業への構成的グループ・エンカウンター導入の意義と課題」『帝塚山大学心理科学論集』第3号、2020、pp. 1-12.）
- 5) 國分 康孝 著、國分 久子 監修『構成的グループエンカウンターの理論と方法 半世紀にわたる探究の成果と継承』図書文化社、2018、p. 8、p. 25.
- 6) 水野、前掲書、p. 35、p. 76.
- 7) 國分 康孝 総編集、國分 久子 総編集、片野智治 編集代表『構成的グループエンカウンター事典』図書文化社、2004、pp. 396-397.